

●木津川の草刈り、刈草集積作業 11日 13日

11月11日（水）木津川右岸大曲 29番～30番 23.2キロ付近 草刈り後の刈り草（大袋7つ）を集め、里山農園に運びました。太田、有田、大釜、森島、播川さんの5名で作業しました。

11月13日（金）寺村自動車裏、25番～27番 17.7キロ付近の草刈りをハンマーモア2台を使って、大釜、太田さんで行いました。草は背丈以上に伸びている場所もあったり、クズが繁茂していて刈り歯に絡み付いたりして、最後には1台の

ハンマーモアのベルトが切れたり、昨日購入したガソリン 10リットルでは足りなくなり

買いに走ったりしていたら、作業が昼食抜きで午後2時過ぎまでかかってしまいました。お疲れさまでした。



●中聖牛1基完成、残りの2基も柵敷木を残すだけまで完成

14日（土）は播川、森島、有田、太田さんの4人で、15日（日）は前日の4人に加え、大釜、吉村さんの6人で作業しました。土曜日には150m(10kg)の針金を新しく開けたのですが足りなくなって、15日（日）には木津のカインズホームまで15m巻き5本買いに走りました。日曜日だということもあり、近くにはどこも大巻の10番の針金が入手できませんでした。それぞれ頑張って作業しているのですが、何しろ人数が少なすぎて遅々として作業が進みません。それでも日曜日の夕方には、なんとか1基は完成、残りの2基も柵敷木の固定を残すところまで出来上がりました。



次週の21,22日は竹門先生が竹蛇籠製作講習会を呼びかけていて、22,23日は同じく竹門先生が生き物調査と地形調査を予定されています。

●京都府交響プロジェクト 第1回パートナーシップミーティング 11月16日（月）

交響プロジェクトのミーティングが宇治総合庁舎で行われ、里山の会からは副理事長の大村さんが出席しました。参加は13団体で今回のテーマは「子育て@山城北」ということなので女性の方がほとんどだったようでした。大村さんの報告を受けて、里山農園でも小さい子供連れのお母さんお父さんも来られるようになっているし、夏の魚とりの行事でも子供たちがたくさん来るので、里山の会でも子育てに貢献しているのではないかなどと話し合いました。

●読売新聞記事 イタセンパラ報道 11月13日（金）

13日（金）読売新聞京都版に「イタセンパラ復活夢見て」と題した記事が掲載されました。

京都新聞、洛タイ新報に続いて3社目の報道です。「京田辺のNPO木津川で取り組み」という副題でイタセンパラの生態や、中聖牛を使った「魚のすみか作り」の事、イタセンパラの冊子を1000部作り希望者に配布しているなど、とても詳しく大きい紙面で報道されていました。

●会誌 49号編集校正 16日 午後1時～4時半まで作業 4名

会誌はいつも、山村さんが一人で編集されていましたが、現在入院中ですので、山村さんの意向を受けて編集校正などをしなければなりません。

そこで、パソコンに詳しい坂田さんを中心に播川さん、金田さんそれに伊藤でやることになりました。文章の校正や写真入れなど、まだまだ大変ですが、みんなの力を合わせて少しでも読みやすい良い会誌にしようと頑張っています。原稿が仕上がって印刷や製本作業の時には皆様のご協力をお願いいたします。

終わり

2020.11.13 (第3種郵便物認可)

イタセンパラ 復活夢見て

木津川に国の天然記念物「イタセンパラ」を復活させようと、京田辺市のNPO法人「やましろ里山の会」（約150人）が取り組みを始めた。イタセンパラを育て、専門家と協力しながら川の生育環境を整え、4、5年後には中流域で放流する予定だ。（今村正彦）

京田辺のNPO 木津川で取り組み

イタセンパラは、日本固有のコイ科の淡水魚で成魚は約10センチ、寿命は1、2年。流れの緩やかな「わんど」や「たまり」で成長する。秋の産卵期になると、オスの腹部は薄い赤紫色に染まり、メスは冬にかけてインガイなどの二枚貝に産卵。翌年5月頃、稚魚が貝から泳ぎだし、藻類を食べながら成長する。

環境省のレッドリストでは、絶滅の危険性が最も高い「絶滅危惧1A類」に指定されている。河川工事で川の流れが速くなり、生育環境が悪化した事に加え、密漁が相次いで個体数が激減し、淀川水系の木津川では、2007年に確認されたのを最後に見つかったという。

5年前から、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所や、京都大学防災研究所の竹門康弘・准教授（62）が中心となり、イタセンパラを復活させようと木津川の環境整備に着手し、「やましろ里山の会」も協力している。

イタセンパラ復活に向けて中心となる作業が、伝統的な治水装置「中聖牛」を使った魚のすみか作りだ。中聖牛は、川の水の勢いを和らげ、その周辺に魚や二枚貝などが生息できる環境を生み出す装置で、戦国時代から活用されていた。石や丸太、竹などで作った1基の重さは約20トンにもなり、里山の会のメンバーらも手伝って、これまでに9基を川岸に設置した。今年中にもあと3基設け、中流域から下流域に「わんど」や「たまり」を発生させて、生育環境を整える計画だ。

全体を統括する竹門准教授は「イタセンパラを気軽に放流して復活とはいかないが、段階を踏んで進め、里山の会と協力して復活させたい」としている。

里山の会ではイタセンパラに関する冊子（A5判、12ページ）を製作。写真をふんだんに使ったイタセンパラの紹介や木津川からいなくなった経緯、最近の保全活動の様子を記している。1000部作り、希望者には無料で配布する。

里山の会顧問の同志社大非常勤講師 光田重幸さん（69）（保全生態学）は「放流して繁殖するサイクルを表現していく。その過程を見守ってほしい」と期待。理事の太田敏之さん（70）は「息の長い活動になるが、復活を夢見て全力を尽くしたい」と話している。

イタセンパラ＝やましろ里山の会提供
冊子作成＝やましろ里山の会
冊子配布＝やましろ里山の会（京田辺市で）

生育環境整備 4、5年後 放流目指す